

ドイツ文学におけるロマン

理論の研究(Ⅳ)

——バロック時代(その三)——

谷崎英男

はじめに

前稿および前々稿においてバロック時代のロマンの特色に触れ、そのジャンルとして (a) 牧人ロマン (Schäferroman), (b) 宮廷・歴史ロマン (höfisch-historischer Roman), (c) 悪漢ロマン (Picaresque Roman), (d) 政治ロマン (politischer Roman), (e) 風流ロマン (galanter Roman) の5つをあげて、(a) から (c) までの考察を行った。今回は引き続いて (d) と (e) のジャンルについて述べてみたい。

3. バロック・ロマンのジャンル(続)

(d) 政治ロマン

政治ロマンについて考える前に、まず politisch という言葉の意味を吟味することが必要である。手元にある二三の文学用語事典で politische Literatur の項目を引いてみると、例えば、ディーター・クリヴァルスキ (Diether Krywalski) が編集した『文芸学中辞典』(Handlexikon zur Literaturwissenschaft) (1974年版) によれば、政治的文学という言葉は、重点を文学に置くか、政治に置くかによって二つに分れるという。前者の場合は、政治的なも

のは文学的形成に達するまでの単なる一つの可能な素材と見なされるだけである。従ってこの意味では極めて広い概念に用いられ、すべての文学は人間存在のもろもろの問題を取り扱う限りにおいて政治的であり、政治的なものは人間存在の歴史的なものを構成する要素であって、著者の思想や世界観や告白の中で明白になるのである。後者の場合、すなわち重点を政治に置いた場合は、政治的なものから出発し、文学的形成を政治的対決の一手段として考えに入れる訳であるから、もっと狭い概念を志向することになる。この概念に従えば、政治的文学の根底には、公の社会および政治生活において効果的なプロパガンダを行い、成果をあげるために、文学および文学の方法に結びついた政治的な非美学的な意図が存在するのである。通例「政治的文学」という言葉は後者の意味で使用されている。例えば同じ著者の編集した『クナウア世界文学辞典』(Knaurs Lexikon der Weltliteratur) (1979年) では「政治的な内容を取り扱い、政治的效果をねらう著作物」(Schrifttum, das politische Inhalte behandelt und auf politische Wirkung abzielt) と定義し、韻文でも散文でも書かれ、ヨーロッパではギリシャ・ローマ時代から知られ、大きな社会的および精神的な変革が告知されるか、起るときにいつも全盛期を迎えているとしている。そしてドイツ文学における例として中世におけるヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walter von der Vogelweide) (?1170—?1230)、宗教改革時代のウルリヒ・フォン・フッテン (Ulrich von Hutten) (1488—1523) をあげ、特にフランス革命の前や革命の最中には大規模な政治的文学が生れ、19世期の初めにはナポレオンの支配から解放を精神的に準備するために政治的な世論形成に決定的な役割を演じたハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist) (1777—1811)、カルル・テオドア・ケルナー (Karl Theodor Körner) (1791—1813)、エルンスト・モーリッツ・アルント (Ernst Moritz Arndt) (1769—1860) などの人達をすぐれた代表者としている。

またゲーロ・フォン・ヴィルペルト (Gero von Wilpert) によって編集された『文学事項辞典』(Sachwörterbuch der Literatur) (1979年) では「政治的文学」をもう少し広義に解釈し、「対外政策に向けられた愛国主義的から国民的および排外主義的な文学や社会問題に向けられた文学とは対照的に、大抵は国内政策上の問題を文学的な宣伝の形式で表わすものであるが、しばしば上記の形式と区別されないこともあり、多くはある民族の権力意志と精神的・道徳的な力を呼び起す傾向文学 (Tendenzdichtung) であり、内部および外部からの実際のあるいは想像上のおどしに対して、ある民族の伝統的な秩序の擁護と維持あるいは新しい人間にふさわしい秩序の創造へと励ますものである」とし「政治的危機の時代に特に出現し、あらゆるジャンルや形式で、直接的には箴言詩 (Spruch) や時代詩 (Zeitgedicht) で、あるいは物語や戯曲の中で隠蔽された形で表現される」ものとしている。そしてその例として古くはギリシャ・ローマのツキディデス、リヴィウス、タキトゥスから、近くはブレヒト、(B. Brecht) (1898—1956) トゥホルスキー (K. Tucholsky) (1890—1935)、ホーフート (R. Hochhuth) (1931—), ヴァイス (P. Weiss) (1916—) などの名前をあげている。

さらに細かく政治ロマンの問題だけを取り上げてみると、前記の『文芸学辞典』の中で「政治的文学」を執筆しているヨーアヒム・ツィンマーマン (Joachim Zimmermann) は、ロマンという大きな形態は、政治的・社会的状況を詳細に述べるができる広がりのために、政治的文学への傾向を示すことがあり、文学形式上の視点から見ると、歴史ロマンであれ、時代ロマンであれ、その叙述が個人の発展とか辿った道を取り扱うのではなく、むしろ超個人的な相互関係、もっとはっきりいえば個人と社会的・政治的環境との相互依存関係を中心に置いているという点で、他のロマンとは区別されると述べている。ツィンマーマンが政治ロマンの別の形式としてあげているのは、国家や社会の理論的な目的および教育的・教訓的目的を追求する理想国家ロマン

(Staatsroman) である。このロマンの中では、人間の幸福というものが中心に置かれ、しっかりした見取り図をもった世界観的・政治的観点からある国家あるいは社会秩序の理想的な姿が起草されるのである。もしこの草案が実現の可能性を無視した単なる想像上の設計であれば、ユートピアということになる。ユートピア的国家および社会秩序は、世界観的・政治的出発点に従って共產主義的な、貴族的なあるいは自由主義・民主主義的な特性を示すのである。このような理想国家ロマン特にユートピア・ロマンは、表向きの国家および社会秩序が疑わしいものになった時代に登場するもので、その課題は現存の諸状況の理想化あるいは新しい要件が満たされる新しい可能性の提示にある。重立ったドイツ文学史上の例をあげると、シュナーベル (Johann Gottfried Schnabel) (1692—1752) の『フェルゼンブルク島』(Insel Felsenburg) (1741—43)、ハインゼ (Johann Jakob Wilhelm Heinse) (1749—1803) の『アルディンゲロー』(Ardinghello) (1787年)、新しくはユンガー (Ernst Jünger) (1895—) の『ヘリオポリス』(Heliopolis) (1949年)、ヴェルフェル (Franz Werfel) (1890—1945) の『未生者の星』(Stern der Ungeborenen) (1946年) などがある。

以上が通例「政治的文学」とか「政治ロマン」といわれているものの概念であるが, politisch という言葉には、「政治的な」という意味とは異なった意味も存在する。ちなみに1876年版のザンダースの『独語辞典』によれば、一つの意味は「Staatswissenschaft (国家学) あるいは Staatskunst (政治) に関したまたは上記のものに属する」であり、もう一つの意味は「Staatsklugheit (政治的手腕, 政略) それ故 Verschlagenheit and schlaue List in der Erreichung seiner Zwecke (目的を達成するための抜け目なさとする賢い策略), Weltkunst (処生術) に適合した」である。バロック時代のジャンルとしての政治ロマンにおける politisch という言葉は、むしろ後者の方に重点が置かれている。

このジャンルの代表的な作家は1670年からヴァイセンフェルスでギムナジウムの教授となり、1678年以来ツィッタウのギムナジウムの校長であったクリスティアーン・ヴァイゼ (Christian Weise) (1642—1708) である。彼は自分の生徒を社会の有能な成員に教育しようとして、『阿呆物語』の禁欲的な現世否定と道徳的ペシミズムを排撃し、グリンメルスハウゼンが教えているものは、生きているこの世との実際的な対決には何の役に立たないと非難した。ヴァイゼの作り出した文学上の人物は、グリンメルスハウゼンのそのようにこの世の無常に絶望して、神とのみある来世への準備をするために、隠者のように孤独の中へ引き込まれず、むしろ社会の中で政治的に賢明に振舞い、道徳的意識を有益な行動に変えることを学習し、道徳的な実利主義を経済的成功と結び付けようと努力するのである。社会的な名声と道徳的な高潔さ、現世の幸福と魂の幸福とはもはや相互に排除し合う対立点ではなくなるのである。

ヴァイゼは叙情詩や五十以上の劇を書いているが、ロマンとしては三つの成功をおさめた作品を発表している。『世界一の三人の大馬鹿者』(Die drey ärgsten Erbs-Narren in der gantzen Welt) (1672年)、『世界一の三人の賢者』(Die drey klügsten Leute in der gantzen Welt) (1675年)、『政治道楽家』(Der politische Näscher) (1678年) (いずれもライプツィヒで発行) の三つである。まず『世界一の三人の大馬鹿者』の荒筋を辿ってみよう。このロマンの中で展開する事件は多種多様であるが、これらの事件を締めくくっているのは一つの単純な枠組である。ある貴族の荘園領主が死亡し、その遺品の中に遺言が発見され、ほとんど完成している新築の邸宛の戸口の三つの大きな格間の⁽¹⁾中に、世界中でもっともひどい馬鹿者を描くようにと書かれていた。しかしながらどういう人物を描くべきかについて相続人たちの間で意見が一致しなかったため、次の領主になるフロリンドと彼の養育係であるゲラノアと執事であるオイリラスの三人が、あらゆる種類の愚行を観察し、三つのもっとも顕著な実例を見出すために旅に出かけるという訳である。さてこの三人の小さ

な旅行団はドイツを廻る間に、郵便馬車や旅館や夜の催しや湯治場などで、たくさんの馬鹿者たちに会おうのである。女房の尻に敷かれている亭主、けんか好きな人間、書物気違い、ばくち打ち、恋わずらいの人たち、いんちき医者、馬鹿な教育者たち、ほら吹き、高慢ちきな人間たち、食えない学者たち、詐欺師たち、おしゃべりばかりしている学生たち、食い意地の張った人たち、迷信深い人たち、しゃれものの愚者、アルコール中毒者、偽善者、恋に狂った人たちなど——正に愚か者の——大パノラマであった。その上フロリンドが偶然に買った『愚者の世界』という本によって、あらゆる種類の逸話や笑話や愚かな出来事を数えあげる機会が提供される。しかしながらその旅行がオランダ、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガル、ヴェニス、ウォーンと広がっていても、誰が愚行の王冠を頂だくにふさわしいかについて意見の一致を見なかった。そこでメンバーの一人が「英知団体」へ請願書をもって派遣され、その論議の結論は次のようなものであった。「誰が最大の馬鹿者であるかの見通しは簡単につく。すなわち一時のいやさのために幸福を取り逃すものがそれである。これに次ぐのが不注意な原因によって健康と生命を危うくするものか、または名誉や名声を危険に陥れるものである」と。三人はそこで急いで故国へ帰り、空白になって格間にそれぞれに応じて寓意化した人物を描かせたのであった。

このロマンは意外な大成功をおさめ、1672年から1710年の間に10版を重ねたが、これが契機になってその続篇である『三人の賢者』と『政治道楽家』が生れたのである。前者は『三人の大馬鹿者』と対をなすもので、三人の賢者が捜し求められが、本当の賢者は見つからないのである。そして後者では主人公の若者クレスツェンツィオが自分自身の経験を積み重ねて利口になり、社会の秩序に適応してゆく様子が描かれている。

これらのロマンは騎士の武者修行の旅の報告の形式で書かれている。貴族の旅の一行が世間へ飛び出し、その途中で人間の欠点や弱点あるいは美德を色々

と観察するが、彼らはどこまでも観察する側にとどまっていた、事件はレビューのように彼らのそばを通りすぎて行くのである。彼らは自分たちが見たものを判断し、それを「よりよい政治的な、すなわち世慣れた行動のために」(zu einem besseren politischen, d. h. weltmännischen Verhalten)^[2] 利用するのである。このようなレビュー式の技法が政治ロマンの基本図式であり、いくつかの点において、特に事件が直線的に次から次へと生起する点において悪漢ロマンの物語方法を思い出させるのである。しかしながら旅する一行はそれらのエピソードの中へ組み込まれておらず、悪漢ロマンの主人会のように直接的な係り合いをもっていない。

もう一点注目すべき点は、政治ロマンが形式的には前述のように悪漢ロマンと共通点をもっているにもかかわらず、その精神においては根本的に異なっているという点である。前述したように、ヴァイゼのロマンが問題としているのは、社会的で実用的で、公共生活において役に立つ教育の伝達であり、それによって地位の上った市民階級が絶対主義国家において役人としての経歴を始める可能性を手に入れるのである。いわばヴァイゼはそのロマンによって「この世の政治的な教養の理想のための基礎」(die Grundlage für ein diesseitiges, politisches Bildungsideal)^[3] を築いたといつてよい。グリンメルスハウゼンのロマンの主人公がこの世でなめた様々な経験は、ペシミズムと現世のむなしさの認識へと導びくが、政治ロマンは楽天的で、幸福が来世にあるものとはせず、経験と教示によってこの世でしあわせで有能な生活を送ることを可能にする規範を手に入れる方法を教えるのである。

さてヴァイゼのロマンが好評を博したために、市場にはヴァイゼのタイトルに範を取ったロマンが氾濫した。例えば『政治気まぐれ』(Der politische Grillenfänger) (1682年、ライプツィヒ)、『世界一の三人の悪徳人間』(Die Drey Lasterhaftigsten Leute der gantzen Welt) (1685年、フランクフルトおよびライプツィヒ)、『政治大道風琴師』(Der Politische Leyermann)

(1683年),『政治求婚者』*Der Politische Feyersmann*) (1686年),『政治望遠鏡』(*Das Politische Perspektiv*) (1684年, フランクフルトおよびライプツィヒ) などがあるが、ヴァイゼの真の後継者と目すべき人はヴァイセンフェルスでヴァイゼの同僚でもあったヨハネス・リーマー (*Johannes Riemer*) (1648—1714) である。彼はヴァイゼがそのアウトラインを描いたのと同じ教訓的な目標を追求し、社会における正しい抜け目ない行動について弟子たちを教育しようとしたが、リーマーの場合はその重点を道徳的反省よりもむしろ実践的な見識においた。すなわちヴァイゼがその行動の原則を依然として完全に神学的に根拠づけて解釈しているのに対して、リーマーは具体的な実例についての事細かな描写によりかかっている。確かにリーマーは部分的には、旅行記によったレビュー式な形態を取っているが、それは市民的な現実を解釈するのではなく、その現実を叙述するためのきっかけにすぎず、あくまで実践が理論よりも高く評価されるのである。

リーマーは三つのロマンを書いているが、その第一作『政治とんま』(*Der Politische Maul-Affe*) (1679年, ライプツィヒ発行) は二人のギムナジウムの生徒が債権者から逃げ出すところから始まる。大学へ行く旅の途中で、彼らはあるレストランで「とんま」という口きたない言葉を耳にする。これは「ばかではあるのに、うぬぼれている人間」のことである。そこで彼らは直ちに大学に通って灰色の理論にいそしもうとする計画を放棄して、政治とんまを見付けるためにもう一人の仲間と一緒に国じゅうを渡って行くが、あらゆる状況のもので、政治とんまが発見される。そうこうするうちに三人のうちの一人が金持ちの未亡人と結婚したので、彼らはさらにもう少しの間人間の行動について詳しく調べたあとでも、大学に通うのに十分な資力ができた。そして学問は十分あるが、世の中のことについて十分な経験をもたない他の人たちよりも、旅の途中での実践的な経験によってその目標を達成することができたので、彼らはもうこれ以上長く勉強を続ける必要がなくなり、人からも尊敬される職業に

つくのである。このようにリーマーにとっては、市民的な限界の枠内での実践的で賢明なけひきは、当然のこととなっている。彼の描く人物はよい評判を得るために貴族階級の気どった態度を模倣せず、むしろ市民の存在から積極的な価値を勝ち取るのである。それらの人物は法律家であったり、商人であったり、聖職者であったり、職人であったりして、彼ら自身の職業が描写の対象になっている。

リーマーの第二作である『政治腹痛』(Die Politische Colica) (1680年、ライプツィヒ発行)の主要人物は、三人の患者につぎつぎに奇妙な病気の兆候を発見する医者である。最初の患者である商人は、債権者から逃れるために病人であるふりをする。法律顧問の地位を志願する第二の患者は、自分の立場に同情すれば自分に不利になった決定を無効にできるかも知れないと思っている。第三の患者は恋わずらいの女である。これらの病気を直せるのは医者ではない。彼らの希望を達成させることだけが性格の強さに欠けた三人の自称病人の助けになるのである。そして最後にこれまで他人の弱みばかりを観察してきた医者自身がラヴ・アフェアに巻き込まれてしまうのである。第三作である『政治ばか』(Der Politische Stock-Fisch) (1681年、メルゼブルク発行)は、政治ロマンの枠を越えてすでに次に述べる風流ロマンの要素を帯びている。主人公のゾランデはいくつかの情事に深入りし、しばしば信じられないほどの手ぎわのよさでつけまわす女たちから逃れることができたが、結局金持の女と結婚することだけが自分の経済的状況をきちんとすることができることを理解する。彼は悪意のないずる賢さで自分と自分の利益に奉仕するばかりのような振舞いをし、このようなやり方で誰にも大きな害を加えずに金持ちの花嫁を手に入れるのである。政治的な賢明さは社会的な欠陥を個人的な利益に変えることができるのだと、この物語の意味を解釈することができるであろう。

リーマーが第二作で医者の人常生活を描いたのに対して、職業的音楽家の生活を取り扱ったのは、シュレジア地方の小都市ゾーラウ(現在はポーランド

領)の教会音楽指揮者であったヴォルフガング・カスパー・プリンツ (Wolfgang Caspar Prinz)(1641—1717)年の三部作『迫害された音楽家』(Musicus Vexatus)(1690年),『寛大な音楽家』(Musicus Magnanimus)(1691年),『好奇心に富んだ音楽家』(Musicus Curiosus)(1691年)である。これらの中ではコターラ,パンカルス,バッタールスという三人の音楽家の生涯が物語られる。まず貧しい職人の息子であるコターラは,音楽家の存在を軽んずる父親の意志に逆って自分の意志を通し,ある音楽家のもとに見習修業に出る。欠乏と屈辱の何年かがすぎ去ったが,師匠と奥さんの不貞を同時に現場でとらえたときに,やっと転機が訪れる。秘密を打ち明けられると困るので,師匠夫婦はコターラに色々和好意を示してくれるのである。五年以上たってコターラは年季明けになり,所定めぬ放浪生活が始まる。ある町にきたとき,彼は亜麻布職工の娘と恋に陥るが,職業を変えて未来のしゅうとなるべき人の工場に入らなければ結婚を許されない。しかしコターラをこのことを約束できないので,再び放浪の旅に出る。しかし盗賊に襲われ身ぐるみはがれる。後悔しながら彼は自分を愛してくれたピッコラのことを考えるが,無一文になってしまった今自分の夢の実現など望むべくもない。ところがその時幸運の女神が彼を助けくれたのである。すなわちコターラはドッカーテン金貨が一杯に入っている財布を見つけるのである。こうなるとコターラは他の既に選ばれていた求婚者よりもっと多くのものを提供できたので,亜麻布織工は結婚に同意する。またコターラは,昔の音楽の師匠の地位を引き継ぐことができることを知るのである。歓喜のうちに結婚式が始められ,それにはパンカルスとバッタールスも参加する。さてコターラが故郷へ帰る途中で,パンカルスは自分の生渉を物語る。彼はコターラとは違って高貴な大ブルジョアの出身で,十分な教育も受けている。父親は音楽家になろうとする息子の希望に道を開いてやる。パンカルスはまもなく卒業資格を取り,イタリアへ移っていくつかのオペラハウスのアンサンブルで演奏し,ついにある宮廷楽団に安定した地位を見出す。しかしな

がら宮廷生活の陰謀や偽善に嫌気がさしたので、ドイツへ戻る。ここでパンカルスはコターラと同様な目に会うのである。

すなわち彼の恋人の両親は、財産も定職もない音楽家との結婚を承知しようとはしなかったのである。パンカルスはしばらくの間コターラの所に身を寄せるが、村の学校の教師の口が空いたときに、彼のつきも変ってきた。パンカルスは多くの学問を身に付けていたので、その地位が与えられ、恋人と結婚することができるのである。

最後にバッテリースは、コターラよりももっと恵まれた庇護のもとにその音楽生活を始めるのである。音楽家の師匠の息子であったため、すでに早くから卒業資格を取り、三年間の予定で大学へ進んだ。しかしその時人生を見たいという欲望に取りつかれる。波瀾に富んだ浮き沈みの中で、彼は様々な職務につき、検閲簿係としてトルコ戦役に従軍したり、またポローニャで大学に通ったり、ある宮廷の女官と知り合いになったりしてもはや自分の希望が果たされたかのように思う。しかしながらある緊急な使命を受けて派遣された時に、海賊に連れ去られる。彼のいいなずけであるラウレッタは、彼が死んだものと思い、馬術の指南役と結婚してしまう。しかしながらとどのつまりはすべてがよい方向に向い、バッテリースは未亡人になっているラウレッタを見出し、二人は結婚するのである。

音楽家という職業に対する小市民的な反感に自ら悩んでいたプリンツは、明らかにこの三部作の中で音楽家に対する偏見を弾劾し、音楽家が職人階級と同等の立場にあることを証明しようとしたのである。そのために彼は修業時代の苦しい生活を描き、それが後になって報いられることを示したり、色々な生い立ちの登場人物を通して音楽家という職業が決して旅回りの放浪者の無益な活動ではないことを明示するのである。しかしながらこのことが正当と認められるのは、ただ忍耐することによってではない。古くから存在するギルドの代表者達が抵抗するのを放棄し、音楽家の立場を尊重しないまでも、それを許容す

るときに、音楽家は幸福になり満ち足りるのである。三人の音楽家の政治的な賢明さは、偏狭で固った周囲の状況をあなどりもせず、また無条件に屈服もせず、自分達の芸術を一つの職業のように営ましてくれる、彼らにとって受け入れられる生活の仕方を求めた点にあるのである。

プリントと同じように音楽家の生活を素材にしているのは、ライプツィヒの聖トーマス教会の音楽指揮者であったヨハン・クーナウ (Johann Kuhnau) (1660—1722) である。彼の作品『音楽ずきのにせ医者』(Der musicalische Quack-Salber) (1700年) の主人公カラッファはドイツの音楽家であるが、修業中の遍歴時代にしばらくの間イタリアに滞在する。ドイツに帰ってからは、イタリア人の音楽家のほうが一般に尊敬されているので、イタリア人の芸名を使って成功しようと望む。最初はうまく行くが、まもなく平凡な音楽家の正体がばれ、ひどい貧乏に陥る。そこで一人の司祭が反省してよい音楽家になるように説得する。カラッファは態度を改めることを約束するのである。ここで描かれているのは、プリントのように音楽家の市民社会における職業の同等性を主張することではなく、市民社会において名声と信頼を獲得すべき職業的誠実さへの改心なのである。

同じようなやり方でシュレジア地方の商人達の貴族願望を非難しているのは、バロック時代の代表的叙情詩人でもあり、劇作家でもあったアンドレアス・グリューフィウス (Andreas Gryphius) (1616—64) のおいであったパウル・ヴィンクラー (Paul Winckler) (1632—86) である。彼はその『貴族』(Edelmann) (1696年) の中で、古くからある貴族の家族と、金で地位の向上を願う成上り貴族との比較を試みている。アムステルダム出身の若い商人の息子であるフロリンはウィーンへ向う途中であったが、ブレスラウの近くで、乗っていた馬車が運休になってしまう。そこである旅館に泊まり、そこで成上り貴族の振舞いを身をもって体験したり見聞したりする。また彼はある貴族と知り合いになり、積み荷と一緒に乗せて貰い、さらにウィーンへの旅を続け

る。ストーリーは旅館のシーンや旅館の主人の物語を巡って展開する。この旅館の主人は、政治的賢明さを誤解した代表的な例である。彼の両親はもっとましなものになるだろうと考えて、聖職者になるように希望していた。しかし彼はむしろ世慣れた紳士ぶった振舞いをしている。そして手に入れた偽の免状によって外国で有名な学者になるまでに至ったような印象を与えている。しかし実際は家庭教師としてやっと暮らしていたにすぎなかったのである。ところがある金持ちの未亡人との都合のいい結婚によって必要な財政的な基盤が手に入る。この最初の夫人の死後、彼は相続した遺産で地所を買ひ、落ちぶれた貴族の女と結婚をし、やがて叙爵書が入手できると思うのである。しかしその叙爵書の代金を払わないうちに、新しい親族のものがその叙爵書を台無しにしてしまう。この二番目の妻が死んだとき、彼は後悔し、旅館の主人という職業に安んずるのである。なるほど彼は今は簡素な生活をしているが、もはや他人のねたみや陰謀に巻き込まれることを心配する必要はないのである。

理論的な教養の素材の伝達を目標としたヴァイゼの概念とは明らかに距離を置いているのは、ヨハン・ベアー (Johann Beer) (1655—1700) の政治ロマンである。彼は上部オーストリアの人間で、1676年から1683年という短い期間にさまざまなペンネームでロマンを書き出版したために三十年ほど前になってやっとその実体が判明した人である。彼は旅館の息子として生れたが、家族と共にレーゲンスブルクに移り、ここで詩人や音楽家や俳優として活躍していたようであるが、1679年には音楽家としてヴァイセンフェルス公の官廷へやってきた。ちょうど同じ頃にヴァイゼとリーマーもそこに滞在していた。ベアーはグリーンメルスハウゼンの唯一の後継者ともいえる人で、グリーンメルスハウゼンの作品から多くのものを受け継いでおり、自主独立の創作者というよりはむしろ天才的模造者ともいべき存在である。

彼はすでにレーゲンスブルク時代に当時の文学に係り合いをもち、自ら確言しているところによると、『アマディス』全巻を読んだり、フランス、イギリ

ス、イタリアの宮廷・歴史ロマンの代表的なものや、ブーフホルツやアントン・ウルリッヒなどのドイツで生れたロマンのことも知っていたが、特にグリーンメルスハウゼンとヴァイゼを高く評価していた。そして前者からは悪漢ロマンの背景を、後者からは政治的教化を受け入れたのである。

彼の初期の作品は『アマディス』の影響の下に書かれているが、『阿呆物語風世界のぞきからくり、あるいはヤン・レプフーの冒険』(Der Symplicianische Welt-Kucker, oder Abentheuerliche Jan Rebhu) 4 巻 (1677—1679)。(ハレ発行)に至って初めてグリーンメルスハウゼンの遺産を継ぐに至るのである。このロマンの主人公は悪漢ロマンの主人公と同じピカロで、いきな色事師でもあった。次に簡単にその内容を垣間見てみよう。父親は山番であったが、両親の死後主人公のレプフーは、一旗をあげるために首都へやってくる。彼は小姓として職にありつき、傍ら歌の授業を受ける。ある外国の伯爵夫人が彼に注目し、彼を手元に引き取る。彼女はこの少年を愛するが、無骨者の少年には彼女の暗示が分らない。そしてある恋がたきの陰謀によってその家から追放される。

しかしほどなくしてある愉快的な貴族の家にかくまわれ、この家で彼に大いに好意ある態度を示す若い伯爵夫人スクッローラと知り合いになる。けれども幸福は長くは続かず、彼はまた放浪を続けなければならない。そして放浪の途中またしても外国の伯爵夫人のしかけたわなに陥り、一緒にイタリアへついてくるように要求される。彼の女主人である伯爵夫人の不道徳な生活が描かれるが、この夫人はイタリアの侯爵と結婚しているにもかかわらず彼との関係をあきらめないのである。二人が現場で取り押さえられたときに、彼はやっとのことで逃げ出して処罰を免れる。悲しみのあまり彼はスクッローラのことを思い、いつか再会できることを望み、愉快的な貴族の家で彼女と出会う。結婚するのに何の障害がないように見えたが、スクッローラはある王侯の求婚を無理に承諾させられていた。そこでレプフーは大学へ通ってこの失恋の悲しみをいやそうとする。しかし結婚は幸福なものにならなかったのも、スクッローラはレプフー

に王侯を殺すように依頼する。幸いなことに、レプファーが殺したのは高貴なお方ではなく、王侯を待ち伏せていた暗殺者であったのである。かくしてレプファーは不当にも王侯の信頼を得るが、王侯が夫人の秘密を知ったときに、この若い情夫をこらしめる。自分の無駄な生活に対する後悔の念にかられ、レプファーは反省し、生れて初めて世捨て人になろうと決心をする。しかしながら厳しい冬に耐えかねて再び人間の世界にまいもどる。そしてある貴族(その妹のカスィオペーアが彼を熱愛していた)と一緒にイタリアへ移り、さらに大学へ行くことになった。その後いくつかの情事が続くが、レプファーとカスィオペーアの二人が再びドイツに戻り、レプファーとカスィオペーアとの結婚式が直前にせまったとき、花嫁は死んでしまう。かくしてレプファーはもう一度ある島へと世捨人の孤独の中へ引き込まれる。そしてかつて交渉のあったイタリアの伯爵夫人が後悔の念にかられながらその生涯を終ったことを耳にし、彼女の最後の恋人が彼の仲間になり、二人は一緒に冒険を求めて巡礼の旅に出るが、トルコ人に襲われ、やっとのことで逃れる。ある孤島で隠者の世話で再び健康を取り戻し、故国へ帰る途中で晩年を修道院ですごしたスクローラの葬式に加わる。友人達はすべて死んでしまう。カスィオペーアの母親だけがまだ生存していて彼を財産の相続人に指定する。レプファーは幸せな結婚をし、地方貴族として平穏な日々をおくるが、ついにやまうずらを飲み下す際に、飲みそこなって気管に物を詰まらせ、天国へ召されるのである。

このようにして見てくると、ペーアがグリーンメルスハウゼンから多くのものを受け継いでいることは確かであるが、また相違した面をもっていることも否定できない。まずこのロマンの主人公レプファーは、現世の仮面をあばくためにこの世をすごし、その後現世の空しさに掛り合い、とどのつまりは魂の救済に気を遣う神のいいなりになる道化師ではないのである。彼はこの世にいかんかすべきかを徐々に習得する飼いなされたピカロなのである。確かに彼は運命の浮沈に悩み、時には自分の犯した悪事に対する後悔の気持ちに襲われるが、現世

を永遠に見捨ててのようなことはなくて再び現世に戻り、改めて運命を賭けついに地方貴族にまで昇進して、楽しい気楽な生活をおくることができるのである。次にグリーンメルスハウゼンは、主人公ズィプリツィウスの波乱に富んだ物語の中でパラドクスの改心によって救済史的な神の秩序を暗示しているのに対して、ベアの描く情景の中には現世に固有な個人的な論拠が関係している。すなわちベアは多様な可能性の中から出発し、その主人公は現世と融和し、現世の中でその使命を見出して満足するのである。隠者になるエピソードは、一時的な反省の瞬間をとらえたもので、手に汗を握らせるストーリーの中の中休みにすぎないのである。さらにまたベアの作品には、グリーンメルスハウゼンのもつきびしい教育論が欠けている。その登場人物は前提とされた真理に照してその行動様式を吟味することはせず彼らの道徳はその場その場で取れる経験の結果として出てくるものである。彼らはある意味ですでに現世と救済を互いに同調させることができ、超越と内在の対立を止揚することのできる政治的ピカロなのである。そこでベアはこまごまとした細部、例えば彼の故郷である上部オーストリアをしのばせる風光を詳しく描写するのである。実体のないものは何もない。万物はすべてそれ自身で自立しているのである。隠遁を求めてやまなかったズィプリツィウスの世界は、今や住むに値し、住みうる世界に変わったのである。

世捨て人的な現世忌避を物語技法上のモチーフとして用いているベアの作品には、もう一つ『コリーロの完全滑稽物語』(Die Vollkommene Comische Geschichte des Corylo) (1679—80, ニュルンベルク発行)がある。この作品の主人公は、自分の卑しい生い立ちを漏らすべきかどうか分らないというただそれだけの理由で修道院入りをするのである。最初彼は捨て子と思われて、城から追放された。しかし数多くの危険を伴う事件や情事に打ち勝ち、ついにある大名の出である隠者の物語から、自分がその隠者の息子であることが見て取れるように思い、心から愛していた貴族の娘と結婚することが許される。けれ

ども妻の死後、彼が卑賤な家柄の出身であることが決定的に確かなことになるのである。

ベアの『阿呆物語』風の最後の作品である『ユクンドゥス・ユクンディスマスの伝記』(Jucundi⁽⁴⁾ Jucundissimi Lebens-Beschreibung) (1680年、ニュルンベルク発行)では、階級の差別は廃棄され、金銭と財産が個々人の市場価値を決定するのである。貴族たちの思考方法は商人と全く同じで、財産を増やすことに汲々とするのである。婚姻はお金が増える時にだけ得になる。従って一番いい配偶者というのは大金持ちの人間なのである。ある貧しいれんが製造職人の息子であるユクンドゥスはこの事を聞き、ある貴族の夫人に養子として貰われる。彼は果報者で、単純なためにかえってお金の誘惑に乗ぜられることもなかった。彼の出会った貴族たちが金銭欲に駆られて罪を犯してしまうのに対して、彼はそういう仲間にならないために成功するのである。そして養母が遺言によって彼女の財産を彼に贈り、運命の巡り合いによって最後には行方不明と思われていた養母の娘も悔い改めて母親のもとに戻り、ユクンドゥスは彼女を妻として貰う。このようにしてお金はいつまでも家族のもとに残るのである。

その他『有名愚者収容所』(Der berühmte Narren-Spital) (1681年)は先に述べたヴァイゼの『世界一の三人の大馬鹿者』と極めて類似した作品で、田舎貴族である無精者のローレンツは、何よりも怠情が好きで、ある結婚式の際に近くにある愚者収容所を仲間のハンスと一緒に訪れる。そこには愚者達が絵画館の中のように美しく並んでいる。そして愚者たちがひとりひとり一行に自分の馬鹿げた生涯を物語るが、やがて愚者たちの方が本当のことをいっており、訪ねてきた人間の方がそもそもこの話を聞いて自分自身を再認識しないので、本当は愚者なのだということが明らかになるのである。また『政治煙突掃除人』(Der Politische Feuermäuer-Kehrer) (1682年)では、主人公のヴェルーツォは市民の家庭では煙突掃除人として、宮廷では小姓として愛し合う一組

の男女のひそかな情欲を観察するのである。

ところで音楽史上では知られていたベアを約二十篇に及ぶ匿名で出版されたロマンの著者であることを証明したのは、アーレヴィンで、⁽⁵⁾ 彼は物語作家としても格林メルスハウゼンと同等の地位に置いたのである。アーレヴィンによれば、ベアのロマンは四つの、一部はお互いに重なり合うグループに分けられ、それは同時に一種の発展を告知するものになっている。つまり騎士ロマン (Ritterroman)、悪漢ロマン (Picaresque Roman)、風刺ロマン (satirischer Roman)、ジャンルの上から分類の困難なもの四つである。ここでいう政治ロマンはアーレヴィンの分類では悪漢ロマンとされており、ジャンルの上で分類の困難な四つのロマン『恋するヨーロッパ人』(Der verliebte Europeer) (1682年)、『恋するオーストリア人』(Der Verliebte Österreicher) (1704年)、『ドイツの冬の夜』(Zendorii à Zendoriis Teutsche Winter-Nächte) (1682年)、『楽しい夏の日々』(Die kurzweiligen Sommertage) (1683年)のうち、あとにあげた二つの作品がベアのロマンの文学的頂点をなしている。この二つのロマンはどれもオーストリアの地方貴族の生活をリアリスティックに描いたものである。

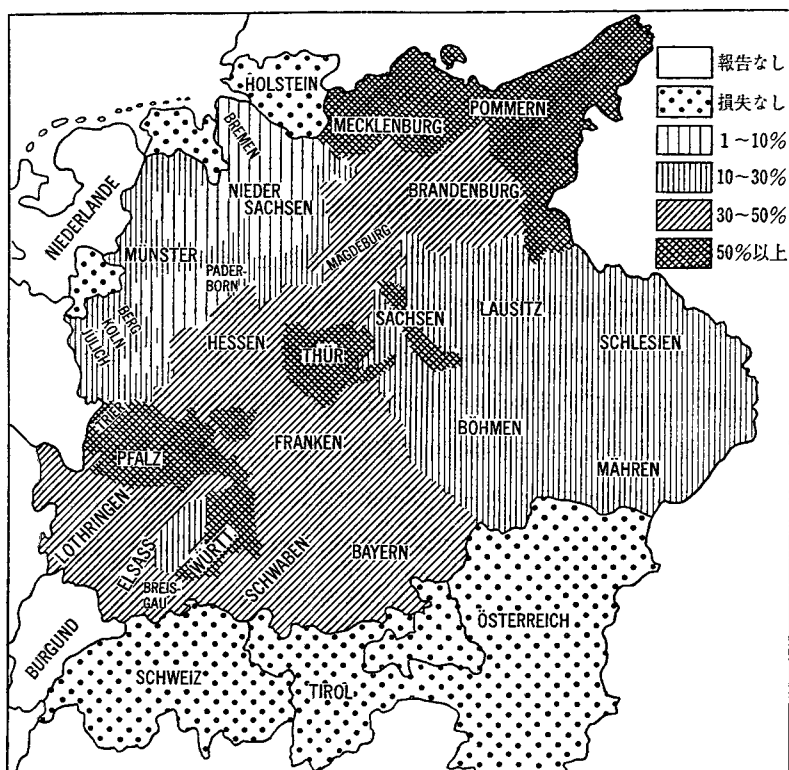
政治ロマンと「阿呆物語」流のロマン (Simpliziade) との間の密接な関係は、ベアの作品の中でもっとも明白に示されている。ヴァイゼはこの結びつきを認めようとはしなかったが、格林メルスハウゼンと政治ロマンの作家たちは、風刺の鏡を通して人間が神に対して不完全であることを非難した点で一致していた。もっとも格林メルスハウゼンは、もっぱら宗教的意図をもってし、ヴァイゼとその後継者はピカレスクの道徳の枠内で行っている点が異なっている。そしてこのことは『不思議な鳥の巣』と『世界一の三人の大馬鹿者』を比較することによってもっともよく例証される。両者とも様々な実例をレビュー風に例挙しているが、主人公が道徳的な訓戒の場に組み入れられるのは、悪漢ロマンにおいても、政治的な成功者の伝記の中でも同じように行われるのであ

る。ペーアはヴァイゼよりもこのことを認識しており、彼の『阿呆物語』への賛美もここからきているのであろう。

(e) 風流ロマン

17世紀はヨーロッパにとって「三十年戦争」(Dreißigjähriger Krieg)(1618—48)と「大トルコ戦争」(Großer Türkenkrieg)(1683—99)と「フランスの権力政策」(Machtpolitik Frankreichs)の世紀といわれるが⁶⁾ドイツにとってもっとも重大な関係があるのが「三十年戦争」であることはいうまでもあるまい。(因みに日本の歴史上将軍家光をいただく徳川幕府が鎖国令を発したのが、1639年のことであるから、彼我の歴史上の事件を比較対照してみるのも興味あることであろう。)三十年戦争の影響については作家でもあり、歴史家でもあったグスタフ・フライターク(Gustav Freytag)(1816—95)が『ドイツの過去の図像』(Bilder aus der deutschen Vergangenheit)(1859—62)の中で特徴づけているように「血と殺人と放火の世代、動産のほとんど完全な絶滅、不動産の破壊、全国民の精神のおよび物質的没落」の時代とする人もおれば、『三十年戦争と1600年から1660年におけるヨーロッパの覇権をめぐる戦い』(1967年、ゲッティンゲン発行)の著者シュタインベルク(S. H. Steinberg)のように「1648年にはドイツは、戦争のために1609年におけるよりも、良くも悪くもならなかった。ドイツはただ半世紀世前とは全く違った状態であっただけであった」とする人もいて、その評価は一定していない。しかしながら戦争によって被害を受けた地域は、種々様々であり、また被害の激しさや被害を受けた期間も同様に多種多様であるから、戦争の影響を一般化して述べることはほとんど不可能といってよいであろう。

1979年に発表されたギュンター・フランツ(Günther Franz)の『三十年戦争とドイツ民族』(Der Dreißigjährige Krieg und das deutsche Volk)の詳細な研究によれば、戦争による直接的な損失は比較的少なく、戦場における戦死者の数も特に多くはなく、非戦闘員に対する権利の侵害も人口の減少の原



三十年戦争中の人口損失

因にはできないとのことである。人口の減少の最大の原因となったのは、とりわけペストであった。しかしながら戦争という条件がペストの影響を決定的に増大させたのであるから、ペストによる死者を戦争の結果に加えないということは、全く不可能なことである。フランツは色々な資料を分析評価した結果、「慎重に査定してみて、この三十年に渡る苦難の時代にドイツの農村人口のおよそ40パーセントが戦争と疫病の犠牲になったと計算しなければならないであろう。都市においては、その損失は33パーセントにしか見積られないであろう」という結論に達している。従ってドイツの人口の減少は全体で戦争前の

1,500 万から 1,700 万の間から、1648 年の 1,000 万から 1,100 万の間であると考えられる。(フランスのあげた地方別の人口減少の一覧表を次にかがけておこう。)

どうして農村に比較して都会の方が人口の減少が少なくてすんだかという、防備を固めた都市は、一般に直接的な戦争の影響から身を守り、周辺からの避難民を受け入れることができたのに反して、村落や平地では人間の身を守ってくれるものがほとんどなかったからである。とりわけ戦争の最後の局面で、戦争が全ドイツに及び、略奪しつくす兵隊や強盗団が国じゅうを荒し回っていたときは、農村に住む人たちの状況は決定的に悪化した。なぜなら繰り返し損害が加えられるために正常な経済活動は不可能になってしまったからである。

従って戦後の最初の課題は、租税負担力を回復するために荒廃した農地を開墾し、農民の働き口を補充し、土地を耕すことであったが、この課題の遂行は、戦争の終結が一般的な農業危機、すなわち穀物価格の著しい下落と重なり、農業に対する不利な財政的な結果をもたらしたために極めて困難であった。商業や工業の面でも、戦後の時代は不況と共に始まり、この不況が克服されたのはやっと17世紀の終り頃になってからであった。各種ギルドの保守主義と資本の不足が経済の再建をさまたげたのである。とりわけ輸出指向型であった工業は戦争前の販売地域を戦争によって他にとって代わられてしまったのである。このようにしてヘニング(F. Henning)によれば、⁽⁷⁾「三十年戦争は全部をひっくりめて、完全に衰えた経済を伴った荒廃した国土を後に残したが、これは国家と国家を代表する領主の活発な経済生活への経済政策に対する理想的な出発点であった」のである。帝国と諸領地の戦後の経済政策の主要目標は、自己の収入を確保し、それと共に自己の権力を強化するために、重い戦争の被害を取り除き、経済的立ち直りのための前提を作りだすことでなければならなかった。国家ないし領主が経済に干渉するということは別段目新しいことではなかったが、17世紀においては、これが絶対主義と密接に結びつき、新しい一個のシス

テムあるいは経済理論として初めて認められるような新しい特質を帯びている。この経済政策を特徴づけて一般に「重商主義」(Merkantilismus)という言葉が採用されているが、重商主義の経済政策にとってはなにかんづく、経済的富の増大が期待される自国内の経済部門を振興することが問題であった。富の大きさは金や貴金属をいくらもっているかではかれ、受け取り勘定を達成すること、すなわちできる限り多くの金や貴金属が自国に流入し、それに反して輸入を削減するように外国貿易を規制することが肝要である。そして重商主義の経済を成功させるためには、まとまった国民経済を作りだすことが必要である。すなわち国内関税が取り除かれ、計量法や重量や貨幣制度が単純化され、交通路が改善されなければならなかったのである。もちろんこのことは絶対主義的国家の典型であるフランスにおいても完全にうまく行った訳ではなかった。

フランスと違ってドイツ帝国には中央集権化した国家組織はなく、ウェストファリア条約の後には、広大な主権領地をもったゆるやかな連合があるだけで、しかもこれらの主権領地の大部分は自立の経済政策を営むには、余りにも小さすぎたのである。しかしながら帝国の諸機関は経済的な問題に関心を持ち、経済政策の問題を国家的な利益の面から解決しようとする法律を公布し、その際には明らかに重商主義的な処置もとられたのである。例えば1676年から79年までは、すべてのフランス商品に対する輸入禁止、1689年にはフランスに対する全面的貿易停止の布告が行われている。

さて1648年10月に皇帝フェルディナント三世とフランスとの間にミュンスターで、同じくスウェーデンとの間にはオスナブリュックで、いわゆるウェストファリア条約(der Westfälische Friede)が成立し、宗教に関しては新旧両教徒の同権と「統治者の宗教」の原則(Cujus regio, ejus religio)(=Wessen Land, dessen Religion)が確認され、国政に関しては諸侯は完全な国家主権を認められ、フランスを模範とする絶対主義の確立の方向へ向った。絶対主義

国家においては、貴族階級に一部特権の認められていた社会秩序は新しい政治構造のもとに服した。中世時代から維持されていた荘園制度的な自治に対して、領主による行政の機関、すなわち厳格な官僚および官庁機構が同等なもの認められ、国家および領主の委託を受けて働く官僚機構がこのようにして中央集権に帰属しない残りの自治組織を次第に国家全体の中へ組み入れていったのである。かくして新しく作られた行政機関と領主の権力を保証する常備軍によって、国家を代表する姿は全体としてそれを外部に向って代表する支配者の周囲に集中するのである。そして行政の中央集権は、前述したように同様に宮廷の必要に応じて組織される国家の重商主義的な指導となって経済面では対応しているのである。経済政策は全く国家と領主に帰せられたが、同時に商人や交易の重大な意味もはっきりと認められた。

かくして17世紀の最後の20～30年には顕著な変化が際立つようになった。すなわち貴族、大ブルジョアジー、商人および知識階級は、絶対主義国家の中での自分たちの任務と自己認識に新たな解釈を加えているのである。⁽⁸⁾ ちょうどこの時代に経済の回復と景気の高揚の局面に伴なわれたいくつかの過程を経て、国家の構造においても、また主体的認識の構造においても重要な変化が生じている。市民階級と市民階級の交易によってえられる富の発展のためのスタートの基石が置かれ、同時に市民階級の重要性は官僚機構の成立によって増大する。ユルゲン・ハーバマースは、官僚機構と常備軍が職に就かず生活している宮廷勢力圏の最初の敵対者として理解すべきことを確認した。⁽⁹⁾ 領主の私生活がそのまま同時に公生活の執行であって、それが公の出来事を代表する形態は崩壊する。ハーバマースに従えば「君主の宮廷へとせばめられ、同時にきわだったものになった公の世間代表の最後の形はすでに、国家から分離しつつある社会の真中にある保留地なのである。いまや初めて特に近代的な意味において私的な領域と公的な領域が分岐するのである」。領主という国家の代表者に対して、複数の公共の組織が立ち向ってくる。それは官僚機構と常備軍におい

てもっとも顕著であるが、重商主義の規制を受けた経済の中で、領主の富に対抗するに至った商人たちの徐々に増大する富も、職業につかないで暮す宮廷の人たちの生活と公けの生活からの分離および個人の予算の国家の予算からの分離の開始を予示している。

以上17世紀末期の社会および経済状況の変化について述べてきたが、このように冗長にすぎる程に書いたのは、悪漢ロマンから政治ロマンへの、また宮廷・歴史ロマンから風流ロマンへの移行の背景を明らかにしたいからである。オルタイルの言葉によれば「宮廷・歴史ロマンの風流ロマンへの、悪漢ロマンから政治ロマンへの移行の中で、ロマンはその神学的正当化の域を越えて社会行動の教へと引き出されるのである」。(In der Wandlung des höfisch-historischen zum 'galanten' und der Schelmenroman zum 'politischen' Roman wird der Roman über seine theologische Rechtfertigung zur Lehre des geselligen Verhaltens hinausgeführt.)²⁰⁾すでに政治ロマンの項で述べたように、政治ロマンに登場する人物は、この世の無常 (inconstantia mundi) に絶望して、神とのみある来世への準備をするために、隠者のように孤独の中へ引き込まれず、むしろ社会において政治的に賢明に振舞い、道徳的意識を有益な行動に変えることを学習し、道徳的な実利主義を経済的成功と結び付けようと努力するのである。

このように現世において自分の行くべき道を見いだし、実用的な処世訓を提供しようとする試みとともに、バロック時代の教条的な基礎は放棄されたと見られよう。バロックの最盛期においては、現実是个々人の経験しうる外界でも主観的に経験しうるものでもなく、神の超越的な秩序であった。現実の意味内容を規定するのは、現象すなわち見せかけの世界ではなく、現世の底に横たわる神のおきてだったのである。上流階級のロマンである宮廷・歴史ロマンがもろもろの現象を理想化して偽造し、当為と存在の同一性を見せかけたのに対して、庶民階級のロマンである悪漢ロマンはもう一方の極端を走り、もろもろの

現象を歪曲して風刺化してしまったのである。すなわち前者は理想を確立しようとし、後者はもろもろの現象を神のおきてを基準として比べ見たのである。後者、すなわち庶民階級のロマンは地上的な存在と超越的な要請を批判的に対置する兆しを示してはいるが、冷静なリアリズムを作り出すには至っていない。バロック最盛期においては、上流階級のロマンでも、庶民階級のロマンでも、作者は可視的な世界を模写はしないで、自分の教条的な世界観に対応した物語を組立てるのである。事件の道具立てや文学的フィクションは、ただ神学的・道徳の体系を例示するに役立つだけであった。従って作り出された人物の個人的・主観的な経験などは必要でなく、物事の背後に隠されている真理の告示が問題なのである。このように見るならば、方向こそ逆になっているが、上流階級のロマンも庶民階級のロマンもバロック最盛期のそれは、同一の教条的規範の二つの変種にほかならない。ロマンに描かれる人物も、高貴な身分の人であれ、並の人間であれ性格としては成長しない。なぜならこれらの人物が世間や自分自身の生存に与える意味は、経験を積み重ねることや色々な事象の価値判断を絶えず変えて行くことから生れてくるのではなく、存在の意味というものは経験に先んじて横わっているからである。人生は超自然的な真理を確認する場にすぎないのであり、その真理の妥当性は、それを受け入れるか、あるいははねつけるかの個々人の決断とは関係がないのである。

しかしながら17世紀も末期になると、先に述べたような社会的・経済的状況を背景として、このような教条的な硬直さはゆるまった。この現世での正しい処し方を教えようとする政治ロマンは実際的な道徳をこっそり教えているのである。この世で成功することはもはや犯罪者のしるしではなく、正直な生活に対する正当な報酬になったのである。人間の犯す誤りは、もはや以前のように神秘的ないし象徴的な相のもとで批判されるのではなく、市民的な秩序と労働モラルに対する違反として批判されるようになったのである。そしてその移り変りを示しているのが、先に述べたクリスティアーン・ヴァイゼなのである。

ところでこれと平行して同じような発展が上流階級のロマンでも生じたのである。アントーン・ウルリッヒは、18世紀の初期に至るまで宮廷・歴史ロマンの理想に忠実に従っていたが、他の著者たちは政治ロマンの例を自分たちの宮廷恋愛物語に利用したのである。

彼らの作品はもはや、先験的な神の救済計画の視点から混乱した現実を收拾することではなく、現世の実際の状況との対決なのである。かつては神の秩序の不気味な敵であった運命の女神フォルトゥーナが宮廷の陰謀家になる。そしてフォルトゥーナの行使する悪魔的な力が平凡な陰謀の術策になるのである。こうなるともはやこれは、王侯のような身分の高い人や普通の貴族や成上り者たちが演戯する風流ロマンの領域である。大きな世界のひのき舞台は、小さなぞきからくりによってとって代られたのである。

しからば風流ロマン (galanter Roman) とは何であろうか。『風流ロマン』(Der galante Roman) の著者ヘルベルト・ズィンガー (Herbert Singer) の定義によれば「愛の物語を宮廷・歴史ロマンの方法で語るけれども、それを英雄的な騎士の冒険や国政上の事件と結びつけないロマンのタイプ」(ein Romantypus, der Liebesgeschichten in der Art des höfisch-historischen Romans erzählte, ohne sie mit heroischen Abenteuern oder staatspolitischen Vorgängen zu verbinden.)¹⁴⁾ のことである。語源的に見るならば、galant という言葉はスペイン語の gala (晴着、盛装) (この言葉はさらにアラビア語までさかのぼるようだが) に発しており、ハイネ (M. Heyne) の『ドイツ語辞典』(1906年) によれば、17世紀にフランス語から取り入れられた流行語で、最初は宮廷服や流行服に関連して用いられていたが、やがて社交会全体に対する態度について「行儀のよい、優美な、(特に婦人に対して) ていねいな」という意味で用いられた。しかしながらこの様な意味は現在ではすたれており、今ではむしろ直接フランス語の galant の影響をうけて「情事に関係した、色事の」(eine Liebesbeziehung betreffend, amourös) の意味で用い

られる。そしてフランス語でいう *poésie galante* (風流詩)⁴⁴ というものは、宮廷・ロマンの項で述べたフランスの17世紀に行われた貴族のサロンでもてはやされたもので、洗練されたエロティシズムやエスプリやコケトリーにみちた会話が売物であった。しかしながらドイツにはこのような貴族的なサロンはなく、風流詩を作り出すような社会的な前提は欠けていたので、ドイツでいう *galante Lyrik* というのは、フランスを手本にした文学的イミテーションにすぎず、ノイキルヒ (B. Neukirch) やメナンテス (Menantes) によってまとめられたいくつかのアンソロジーにおさめられている。*galanter Roman* はもっと公然と好色的であり、もっと軽薄であり、登場人物の秘密な情事についてあけすけで時には好色本に近づいている。従って前述したヴィルベルトの『文学事項辞典』では、*galanter Roman* は *galante Dichtung* の一種類とされているので、江戸時代の風流本にならって「風流ロマン」と訳すことにする。

さて宮廷・歴史ロマンから風流ロマンへの最初の発展の道を開いたのは、アウグスト・ボーゼ (August Bohse) (1661—1742) であった。官吏の子供として生れたボーゼは、学業を終え家庭教師をしたあとで、1685年からまずハンブルクで、ついでベルリン、ザクセンと当時としては珍しいフリーな作家として生活しようと試みたが、その著作によって大きな成功をおさめたのでかなり長い間そうすることが実際にできたのである。そしてそのかわり法学や文体や雄弁について私的な講義をしたり、さらに学問を続けたりしたが、やがて公職に就かない生活がいやになり、公爵の秘書、エルフルト大学の教授、1708年にはリーグニッツの新設の貴族子弟用の寄宿学校の主任教授になって、42年にその地で死去したのである。

ボーゼは並はずれて多作な人間で、教科書を作ったり、逸話集を編んだり、バークレイの『アルゲーニス』や、ラ・ファリエット夫人の『モンパンスイエ公夫人』や、フェヌロンの『テレマックの冒険』などの翻訳を出したりしたほ

かに、全部で14のロマンを書いており、そのほとんどすべては1685年から1700年の間に出版され1720年代まで版を重ねた。ボーゼは風流ロマンの本来のタイプともいべきものを作り出しており、宮廷・歴史ロマンの複雑な筋書きの多種多様なもつれを単純化し、事件を比較の見通しのきく物語へと縮小させたのである。国家行事は背景に退き、恋物語が自立したのである。彼が描いたものは、例えば『愛の迷路』(Der Liebe Irregarten) (1684年)におけるように「人間の心の気まぐれな動き」であった。愛はもはや世界史を規定あるいは解明する事件としては描かれず、しっとや愛着や業務や感情のあつれきの中で汲み尽くされるのである。そしてこのことはボーゼがその題材を『ペルシャのアルツェスティス』(Alcestis aus Persien) (1689年)、『アウローレンス、クレタの王女の国家と愛の物語』(Aurorens, Königlicher Princeßin aus Creta Staats-und Liebes-Geschichte) (1695年)のように、宮廷・歴史的な伝統の中に求めても、その場面を遠い外国に求めようとも、『宮廷の愛の神アーモル』(Amor an Hofe) (1689—91)のように高級貴族のたわむれの愛の喜びを描こうとも全く同じである。どの作品においても世界史を動かす強大なおきてではなく、愛のもつれだけが事件の推進力なのである。そして理性と激情との間の戦いには宗教的な局面はないのである。このようにしてボーゼを原型あるいは草分けとする風流ロマンへの道が開かれ、ズィンガーのいわゆる「ロマンの世俗化」(Säkularisierung des Romans) が行われたのであるが、ボーゼは決して創始者(Erfinder)あるいは新種創案者(Neugestalter)ではなく、巧妙な改作者(Arrangeur)であった。すでに与えられている様々な形式の中から取捨選択し、確かな本能でもって読者の期待に沿った組み合わせを作り上げたのである。

ゲッティンゲンの法律家であり歴史家でもあったヨーアヒム・マイヤー(Joachim Meier) (1661—1732) は、その愛の物語を古代ローマへ移しかえ、『高貴なローマ女性レスビア』(Die durchlauchtige Römerin Lesbia)

(1690年, ライプツィヒ) と『ローマ女性デーリア』(Die Römerin Delia) (1707年, フランクフルト) では、その題材をホラティウスの詩から借りている。彼は全部で5篇のロマンを書いているが、『アマゾンのスミュルナ』(Die Amazonische Smyrna) (1705年, ライプニッツ) では地中海地域における歴史的知識を詳しく述べ、高尚な国家および愛の物語が、歴史便覧のようなおもむきを呈している。ダルムシュタットの司書であったゲオルク・クリスティアン・レームス (Georg Christian Lehms) (1684—1717) も聖書の題材を同じように扱っている。エルンスト・ヤーコブ・フォン・アウトルフ (Ernst Jacob von Autorff) もその『高貴なオロレーナ』(Die Durchlauchtigste Olorena) (1694年, ライプツィヒ) の中ではカール・フォン・ロートリンゲンをめぐる歴史的な事件を題材にし、『プブリウス・コルネリウス・スツィーピオ』(Publius Cornelius Scipio) (1696—1698, フランクフルトとライプツィヒ) では、トロヤの征服からスキピオの死に至るまでの百科辞書的な材料の中に高貴な愛の物語が埋没している。このようにしてみると、風流ロマンだけが宮廷・歴史ロマンの唯一の継承者でないことが確認できるであろう。風流ロマンは特に愛の葛藤を中心テーマにしているが、もう一つ別の支流があって歴史的な知識を敷衍し外国の珍しいことを知らせるために、読者の百科辞典的な関心に迎合し、愛の物語を単に口実として用いているのである。

このジャンルでもっとも成功をおさめたのは、エーバーハルト・ヴェルナー・ハッペル (Eberhard Werner Happel) (1647—1690) であった。神はヘッセン州のキルヒハインで牧師の子として生れ、マールブルクで数学、医学を学んだり、その後教師をつとめたりしたが、1670年にはハンブルクに定住し、そこで死んだ。ハッペルの作品は形式上は宮廷・歴史ロマンの図式を保持している。物語は事件の大きな混乱の時点で始まり、事件を解明するカットバックと、手に汗を握らせるようなさすらいの後に再会する恋人たちが結局結び合わされることによって、めでたしめでたしの結末へ導かれるのである。しかしながら

このような図式は、ハッペルにとっては単なる筋書きのフレームにすぎない。それは宮廷・歴史ロマンにおけるように、世界史の徐々に解き明かされて行く形而上学的な現実の反映ではない。物語の主人公たちは、著者が外国や外国の民族や習慣について教えることができるように、世界中に押し流され辺鄙な民族のところへやってくるにすぎない。混乱した現実は、宮廷・歴史ロマンにおけるように人間存在のアレゴリーではなく、物語における地理学のおよび比較民族学的な補説を組み込むための純粹に形式的な要素にすぎないのである。主人公たちの運命は、『アジアのオノガンボ』(Der Asiatische Onogambo) (1673年, ハンブルク) にしろ、『ヨーロッパのトロアン』(Der Europäische Toroan) (1676年, ハンブルク) にしろ、『島のマンドレル』(Der Insulanische Mandrell) (1682年, ハンブルク) にしろ、『アフリカのタルノラスト』(Der Africanische Tarnolast) (1689年, ウルム) にしろ、つまるところ副次的なもので、その役割はどれとでも交換可能である。ただ歴史的ないし異国風のメーキャップがある種の色彩効果を与えているだけである。ハッペルの作品の中で今日でもなお一読に値するとされ、もっとも重要な学生ロマンのひとつとされているのは、17世紀の大学生活について文化史的に興味ある素描を与えている『大学ロマン』(Der Academische Roman) (1690年, ウルム) である。

さて普通ボーゼの後継者とされているのはクリスティアン・フリードリヒ・フーノルト (Christian Friedrich Hunold) (1680—1721) 年で、当時の人びとにはメナンテス (Menantes) というペンネームで知られていた。小作人の息子として生れたフーノルトは、早くからみなし児になったが、才能に恵まれ、音楽を愛し、1697年から1700年まではイエーナとヴァイセンフェルスで優雅でのんきな学生生活をおくった。その後ボーゼとつながりをもつようになり、同じようにヨハン・ベアーも属していたヴァイセンフェルス宮廷の文学および音楽の集りとも関係をもった。1700年には遺産を使い果たし、債権者から逃げるためにハンブルクへ移り、そこでフリーの作家として生活したり、個人レッス

ンをしたり、劇場と親密な関係をもった。そして長い間ある女流歌手と同棲をしていたが、1706年に『風刺ロマン』が引き起したスキャンダルに巻き込まれてザクセンへ逃げ返り、さらにハレに定住し、そこで市民的でまじめな生活を送り、信心深さと道徳的信念を誇示し、1721年に法学博士で大学講師として死去するのである。

フーノルトは、詩集や作法本や書簡文範やオペラの台本や翻訳のほかに、四冊のロマン、すなわち『多情な世界』(Die Verliebte und Galante Welt) (1700年、『愛らしいアダリー』(Die Liebenswürdige Adalie) (1702年), 『ヨーロッパ宮廷愛情英雄物語』(Der Europäischen Höfe Liebes-und Helden-Geschichte) (1705年), 『風刺ロマン』(Satyrischer Roman) (1706年, いずれもハンプルク発行)を書いている。

第一作の『多情な世界』は、フーノルトがヴァイセンフェルスから逃亡した直後に出版されたもので、イエーナとヴァイセンフェルスの宮廷と都市の物語を集めたもので、第三作の『ヨーロッパ宮廷愛情英雄物語』も同様にヨーロッパの宮廷の記録からセンセショナルで薬味のきいた、あるいはスキャンダラスな事件を集めたもので、ズィンガーはこの二つの作品は本来の意味でのロマンではないとしている。『風刺ロマン』は、ハンプルクの市民社会のスキャンダラスな事件を公表したもので、著者はためらいのない暴露を恐れず、しかも適切な形で行ったので、このロマンの発行は世間を沸き立たせ、検閲の干渉や傷けられた人達の復讐心を呼び起し、ついにハンプルクから立ち去らねばならなくなったのである。テウルザテスとその同伴者のゼランダー男爵が男狂いのフルヴィアの実を結ばない誘惑の試みの目撃者になる。フルヴィアが内気で男嫌いのカウザボーナのところにアドヴァイスを求めようとしたときに、デウルザスとゼランダーはフルヴィアの後を追い、二人の女の奇妙な恋愛ごっこ現場を捕える。このことがきっかけになって、テウルザテスとゼランダーの二人が様々な性の面での脱線について話すようになるのである。ある大学町に滞在

しているときには、彼らは怠けものの学生と横柄な商人と知り合いになり、いかかわしい夜会に加わる。彼らはさらにヴェニスにまで足を伸ばすが、そこで体験したり行ったりすることは、細かい点に至るまでハンプルクで起きた事件やフーノルト自身の生活の事件を想起させるのである。テュルザテスとゼランダールは夜会から夜会へと移って行くが、至る所でみだらなふるまいがなされる。何回かの騒々しい情事を経て、二人はそれぞれしあわせをえて結婚するのである。

フーノルトがボーゼの文学的後継者であるという評判を確立したのは、二番目に発表された『愛らしいアダリー』で、そのプロットはフランスのジャン・ドゥ・プレシャク (Jean de Préchac) の『名高いパリジェンヌ、ありのままの艶話』(L'illustre Parisienne, Histoire Galante et veritable) から借りたものである。ズィンガーによれば、風流ロマンのすべての特性はこのロマンから読み取ることができるとしている。このロマンのテーマはあるドイツの王子と身分の低いフランス女性との間の愛の物語で、ポアトゥのある小貴族の娘であるエレオノール・デスィミエ・ドルブルーズが最初は公式の側室になり、その後長年に渡る努力と交渉の末に結局 1676 年にゲオルク・ヴィルヘルム・フォン・リュネブルクツェレ公爵の夫人になった実際の物語をプレシャクが題材として用いたのである。プレシャクのロマンは、ドイツの読者にとって興味あるテーマのせいであろうが、1680 年、86 年、1722 年、34 年と 4 回も翻訳された。フーノルトはこのロマンに手を加え、若干の考案した挿入物を組み入れて原作の二倍以上のものに拡大したのである。

まずプレシャクのロマンの荒筋を辿ってみよう。ロマンのヒロインであるブランシュはある裕福で社交界で大いに声望のあるパリの銀行家の娘である。主人公の王子はおしのびで旅行をしていて、この銀行家の家にハンプルクの商友の息子となって現われる。王子はすぐ美しいブランシュに恋する。まもなくして王子は政治的な混乱にまきこまれてイギリスへ逃亡を余儀なくされる。彼が

ブランシュにあてて書いた手紙は紛失してしまう。ブランシュは恋人をさがすために王女のお供をしてドイツへ旅行する。そしてハンブルクで、商友の息子が死んだことを知る。一方王子の方は、パリで銀行家の娘——実際はブランシュの姉のことであった——が結婚したことを知り、ブランシュに絶交状を送る。二人のどちらもお互いに相手にきょうだいがいるかどうかを尋ねたことはなかったのである。別れた二人はツェレの宮廷で再会するが、お互いに相手の正体が分らない、そうこうするうちにブランシュの父親は、ハンブルクと色々な連絡を取り、例の商友にパリにいるといわれているもうひとりの息子がいることを突き止め、結婚式の日取りが決められる。しかしブランシュがハンブルクで出会ったのは、全くの別人で実のない無骨者であった。彼女はひとりぼっちになって逃れるが、そこでも様々な追跡に悩まされ、ついにエミーリエ王女の宮廷へ避難する。また一方では王子はパリで全部の実情を知り、ブランシュを求めて宮廷から宮廷へと旅をし、エミーリエ王女の所でブランシュを見つけ、大団円となるのである。

この荒筋からも察せられるように、外面から見ると一見宮廷・歴史ロマンと係り合っているように見える。すなわち愛し合う二人がまず喜ばしい出会いをした後、多くの紛糾やかっとうに巻き込まれた末、窮極的には再び一緒になってハッピーエンドになるのである。しかしながら根本的に相異しているのは、まず第一に愛し合う二人が宮廷・歴史ロマンにおけるように、高級貴族ではないことである。ヒロインのアダリー（プレジャクのロマンではブランシュ）は市民階級の出身であり、このアダリーに王子が恋をするのである。そして最後には、個人的な愛着、愛の力が階級の差別に打ち勝ち、アダリーが階級制度のヒエラルキーを上昇して行くという起りそうもないことが起るのである。超越的な歴史のおきてが好意や反感を規定するのではなく、恋愛の神アーモルの自由なたわむれがそれを規定するのである。アーモルは、宮廷・歴史ロマンにおいて運命の神フォルトゥーナの占めていた地位を代って占めるようになったので

ある。フーノルトは『多情な世界』の序言の中で、ロマンはもっぱら「恋する人たちだけを取り扱う」(von Verliebten handeln) べきであるとし、「世界をすべての人々の眼に開かれた広場としてでなく、秘密な愛の小部屋として見る人は、容易に私に賛同してくれるであろう」(Wer die Welt nicht als einen aller Augen geöffneten Platz, sondern als ein geheimes Liebes-Cabinet durchsehen, wird mir leichtlich Beyfall geben.) と続けている。

宮廷・歴史ロマンの舞台であった大世界劇場、公の舞台は、ここでは風変りな恋の手練手管を伴った愛の舞台にせばめられているのである。アダリーの運命は「愛の宿命」(Liebes-Verhängnis)、エロスの世界における風変りで奇妙で代表的な履歴書として解釈され、しかもその手綱を取るのは気まぐれなフォルトゥーナの神や、天の配剤の英知ではなく、勝手気ままなアーモルの神なのである。ズィンガーによれば、恋愛関係の迷路のような錯綜こそが風流ロマンの本来のテーマであり、そして恐らくボーゼのロマンの成功をもたらしただけであろう。ボーゼのロマンのタイトルが暗示するように、「愛の迷路」(der Liebe Irrgarten), 「愛の小部屋」(Liebes-Cabinet) における「恋人たちのもつれあい」(die Verliebten Verwirrungen) が当時の人たちの好奇心を大いに引きつけたように思われる。

風流ロマンは、18世紀に入っても、フーノルトの唯一の後継者とされているニュルンベルクの都市貴族であったヨハン・レオンハルト・ロスト (Johann Leonhard Rost) (1688—1727) (彼は九編のロマンを残している) や、ロビンソン・クルーソー風のロマン『フェルゼンブルク島』(Insel Felseubnrg)

(1731—43) の著者としてむしろ知られているヨハン・ゴットフリート・シュナーベル (Johann Gottfried Schnabel) などによって書かれているが、シュナーベルのロマン『愛の迷路をよるめき歩く騎士』(Der im Irr-Garten der Liebe herum taumelnde Cavalier) (1738) は、キンペルによれば³³すでに1740年に始まる市民的な啓蒙ロマンの到来を知らせている。

アルノルト・ヒルシュの指摘する所によれば、⁴⁴ 1700年頃ドイツでは新しい教養ある階級層が生れ、その存在がロマンに反映されている。高級官僚や大学関係者や小貴族や新貴族の中から新しい門閥が形成された。彼らは宮廷には受け入れられなかったが、宮廷の生活様式を模倣し、やがて自分自身の自意識を発展させていった。裕福になった商人たちから絶えず新しい人々の流入をうけるこの層が、多分風流ロマンの読者層とみることができよう。キンペルによれば、1615年から69年までにドイツではおよそ三十のオリジナルなロマンと六十の翻訳が出版されたが、1670年から1724年までは三百以上のオリジナルなロマンと約百五十の翻訳であった。

しかしながらイギリスの「道徳週刊誌」(moral weeklies)の影響をうけて、1713年に初めてハンプルクで道徳週刊誌が刊行されて以来、1720年以後はロマンを攻撃し、排斥する道徳週刊誌が同じ層の市民階級の人びとに読まれるようになった。同時に宮廷ではほとんどもっぱらフランス語が話されたり読まれたりしていたし、文盲に近かった小市民たちはロビン・ソンクルーソー風のロマンや宮廷・歴史ロマンの亜流に心を奪われていた。かくして1720年以降は、風流ロマンはその読者層を失い、やがてイギリスの作家サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) (1689—1761) の感傷的なロマンの影響を受けた道徳的教化的な家族物語に最終的に取って替わられるのである。

注(1) 格間(ごうま)というのは格子状に組んだ格縁(ごうぶち)内の区画のこと (Feld)

(2) Hans Gerd Rötzer: Der Roman des Barock

(3) 同上。

(4) Jucundi はラテン語で jucundus (愛すべき、人気のある) の二格で, jucudissimus はその最上級である。

(5) Richard Alewyn: Johann Beer 1932, Leipzig

(6) Volker Meid: Grimmelshausen 1984, München

(7) Friedrich-Wilhelm Hennig: Das vorindustrielle Deutschland 800 bis 1800 1977, Paderborn マイトの『グリンメルスハウゼン』による。

- (8) Hanns-Josef Ortheil: Der poetische Widerstand im Roman 1980, Regensburg
- (9) オルタイルの前掲書による。
- (10) オルタイルの前掲書による。
- (11) Herbert Singer: Der galante Roman 1966, Stuttgart
- (12) 白水社版『仏和大辞典』による。
- (13) Dieter Kimpel: Der Roman der Aufklärung 1967, Stuttgart
- (14) ズィンガーの前掲書による。